石文化とデザイン思考

—— 金沢 —1

小 松 喨 一

序

人間と石との結びつきは古く極めて深い関係を辿ることができる。すでに旧石器時代より石材で器物を造る技術，また築石技術も早くから発達していたことは多くの遺構などから知ることができる。

長い歴史のなかに人類文化を支えてきた要素の一つとして石文化をあげたが，具体的に説明するまでもなく，古代オリエントにおけるエジプトからアツシリア・カルデアにわたる石造建築や生活の行為のなかに強く生き続けてきた石の影響力に魅力を感ぜずにはいられない。

我が国においても，木の文化といわれながらその底辺には大きな石の支えがあり，日本独自の石文化の歴史を形成してきている。都市であり，小さな村落にせよ大衆の生活環境のなかに石が形づくる数々のものは，或る面では物言はぬ力となり，また造型面でも人間の創造の美として文化や生活を形づける大きな要素となっている。

日本は気候風土により木材の種類も多く，材質も優れており木工技術の進歩は早くより発達し世界に類を見ない木造建築を造りあげている。しかし石材に対する関心が薄かったわけではなく，古代における石材遺構もそうだが，人間の精神対話を求めた信仰の対象としての野石の存在にはじまり，石塔，石像，石灯籠等の宗教的造型においての結びつきが強く見ることができる。

法隆寺，飛鳥寺等の建造物に見られる回廊の礎石，玉石敷参道，また鎌倉時代に入り仏教の大衆化にともない各種の石造工芸品の使用が一段と広まってくる。それに伴い石工，石匠といった職能的地位や役割も確立してくると，各地における産石地の開発が段々と組織化され重要性をおびてくることになる。

その石による生活環境整備として，仁徳天皇の時代には有名な石積みによる淀川改修工事がおこなわれた記録も残っている。また武家社会を形成する以降に築かれた域郭の櫓台の基礎となる石垣などは，日本独自の石積み技術による優れた建築物であり，石造型のデザイン表現としても最高の美的効果を見せてくれる。

日本庭園における「庭石」は，中国の作庭要素として伝たわってきたものであるが，今では日本人の美意識により石に対する感覚は，世界に誇る造園技術を完成するに至っている。

明治以降は，洋風建築が盛になるにつれて石材の利用も急増し，日本における石材産地も全国にわたり開発され，産地によっては産業化されてゆくことになる。

日本の国土は，その中央に山脈が流れており，平野よりの傾斜面と山溪谷が多く，地勢によっては海岸線まで強く張り出し，海べりを頼りに独特の生活の場を形成している処を多く見ることができ，日本特有の石垣文化を見いだすことができる。

地形の変化による急流河川の多い日本では，河川の保護，改修には昔から石の利用と技術や改良の努力の歴史があるが，江戸時代に入って，荒川，利根川，天竜川といった有名河川護岸工事においての石積み資料には見るべき技術が記録されている。また石の運搬，石積み技術の工人は，単に護岸工事技術だけにとどまらず，日本の石積み技術として発達し，機能とともに意匠的にも画基的造型を見いだすことになる。特に城郭の構築においては，石引人夫，石工，石垣師の発達に結びつき専門職として高く評価されてくる。

石積み技術は，さらに河川工事，魚落護岸，

農耕・塀垣，用水，石橋，井戸石組等あるが地域風土生活様式によってさまざまな石垣文化の形成を深めることになる。

石積みの美と構成

城下町金沢には多くの文化遺産が残されているが，移りゆく時代のなかで今も新しい視野によって守り受け継がれていることは嬉しいかぎりである。

金沢には，伝統工芸，さらに芸能，文学，哲学といった人文文化に対し，社会文化といわれる町並や建造物，庭園や用水，また地形景観に歴史を感ずる環境文化の存在が強く認識されている。

この環境文化のなかで，控目ながら金沢の面影を今も静かにささえているものに石垣の声を聞くことができる。金沢の地形要素のなかで視覚像として捉える石積みの味合いは温くもりのある都市空間でもある。

清流犀川，浅野川は金沢人の哲学的表徴でもあり，人々は，水面に見え隠れする川石に詩情を感じ，石積みの堤や台地にそうように高く積み重ねられた石垣の姿に金沢を強く印象づけられる。よく「自然との共存こそ，美しき金沢の真の顔である」と言はれるが，その金沢に昔から人間の願いをこめて使われてきた石や石積みが何を語りかけてくれるのか，この石の声を歴史や造型要素とともに結びつけて見たい。

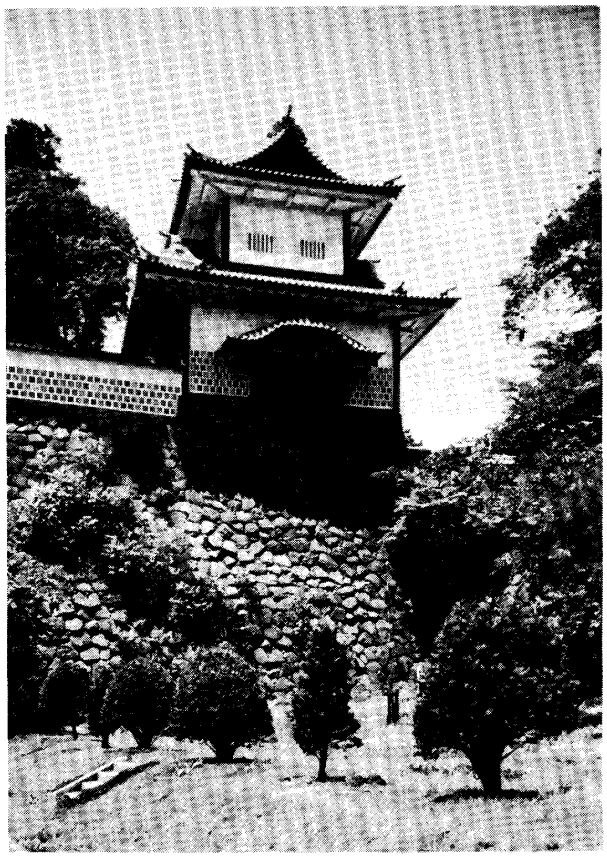
わが国では，何処えいっても石垣をかい見ない地域は少ない。最近はコンクリートブロック，人造石垣の利用も多く見られるが，いささか味気なさを禁じえないが，それとて石塊，石片の要素がないわけでなく，河川護岸，宅地環境，地形整備には昔ながらの石垣的要素と絶縁することはできない。この石垣は日本における石文化の厚味を盛りあげる意味で，また縁の下の力もちとして重要な存在であるばかりか，地域風土に適応する造型美の要素として，風土に生きる背景としても評価されるべきであると考える。

たとえば，瀬戸内に浮かぶ倉橋島は，石の産地であるとともに全島が段々畑をめぐらし石垣によって包まれている。これを見ると美的要素もさりながら，伝来の幾世の生命の労力を感じぜずにはいられない。

四国津島町北灘は，半農半魚の石垣集落を形成していることで知られているが，往来より台風銀座と言われ，石垣の上に石垣塀を造り住居を保護し，また石垣で畳みあげた段階農地が特異な環境を見せてくれる。

屋敷石垣は，どこでも見られる風影であるが，石垣と樹木に守られた家屋に古い歴史を感じ日本的情緒感を興えてくれる。また荒海に面した集落では，護岸壁として河川や土手の石垣は，地形の美として，その地方の風土の特色が石積みとともに環境のデザインの役割を果している。

また史的城下町に見られる。さまざまな石垣の形状には，歴史の重み，優雅さ，生活の土壌といったものを感ずる。その城下町金沢の石垣，石積みを見る場合，当然金沢城の石垣をあげなければならない。



金沢城は，幾多の天災や火災によって，天守閣，その他多くの建物はすでに消失しているが，石川門（1788）は天明8年に再建されており，三十間長屋は（1858）安政5年に建てられ今も現存している。その他二の丸の石垣，大手門の

石垣などは残っており当時を知る貴重な資料となっている。

信長による安土城の構築と巨石使用は，以降の築城に強い影響を興えたと言はれているが，金沢城は秀吉の朝鮮遠征の頃，前田利家の命により，前田利長，家臣で築城技術にすぐれていた篠原出羽守一孝によって造られている。石垣の石積みには，近江穴生より石工を招き，石工達の知恵と人力によって合理性と美的要素を加味した堅固な構えである。

穴生とは「アノウ」と呼び，安土桃山時代に近江の穴太から出た石垣師を言っているが，江戸時代には広く石垣師の通称となっていった。穴太は比叡山下の坂本在に入る地域であり歴史的に早くから基石や輪塔の巧みな石工が多く彼らは石塔師と呼ばれていた。

安土城築城のとき石垣造くりに参加，穴太の石工達はこの幸運を振出しに，安土城完成後は石垣師として各地の武将に迎えられ，江戸時代に入ると諸大名に高禄で召し抱えられた者も多く，また出先に終生居着した者も多くいる。穴太，穴納，穴濃，安能，阿野阿武などの苗字や地名が残っているのは，おそらく彼らの筋を引くものである。金沢にも穴町が存在していた記録が残っている。

彼れらの石積みの技術は，いろんな流儀を生み，彼れらの積み方を「アノウ築き」。巨石の運搬方式にも「万力取り」，「セミ吊」，「枕渡」，「修羅送り」等の方式がある。これらの記録については「西滝文書」に詳しく記るされている。

金沢城に使用された石材は，ほとんど金沢近郊戸室山より切り出された戸室石であるが，一部越前石，高石垣には犀川上流法島の川石が使用されている。石川門内部構成は桝形になっており，外壁や門脇の石積みは，左手の方は単に石の角を，うちかいだけの荒積みであるが，正面は寸分のすき間のない積み方で見た目に美しく登りにくいと言った感じである。石の形態は長形で奥深く（約幅の３倍）積んであり，荒積みの隙間には葹石で埋め止められている。

兼六園側，即ち百間堀に面する石垣は，樵石の切石で積まれているが，中腹では粗雑にしてあるのは櫓を美しく見せるためと思う。石垣が余り高いので，保全のため上部に犬走りの段を作っているが，この美的欠点は唐破風造りの出窓でおぎなっていると言はれている。

石川門よこに高く聳える二層の櫓は，美の表徴であるが，この櫓の平面は正四角形でなく菱形になっており，それに伴う柱，礎石の切り方も「菱形」で，矢や鉄砲を射ちやすくしてある。この櫓は（1799）寛政７年に地震で破損したが（1814）文化11年に改築している。菱櫓の石積みは他と少し変った風に見えるのは積み直しをしているためである。

三十間長屋は，往来城内には幾棟もあったようだが，現在残っているのは本丸の三十間長屋である。昭和32年重要文化財に指定されているが，長さ47m，幅5.5ｍの二重二階建の頑丈な武器倉であった。外装は，なまこ壁で出窓を設け防備を施してある。土台は戸室石垣であるが，石垣の高さが約１ｍ80，湿度を考え造ったものである。

二の丸の石垣は城内の石垣では比較的大型の戸室石を使っていて最も立派な石垣と言はれている。大手門の石垣は，利長の采配で造られたと伝えられ角石は城で一番大きな石が使われたといわれている。大手門の石積は薄い石を用いているが，このような積み方を鏡積みと名づけ裏詰天石は一切用いず残らず栗石を使っている。

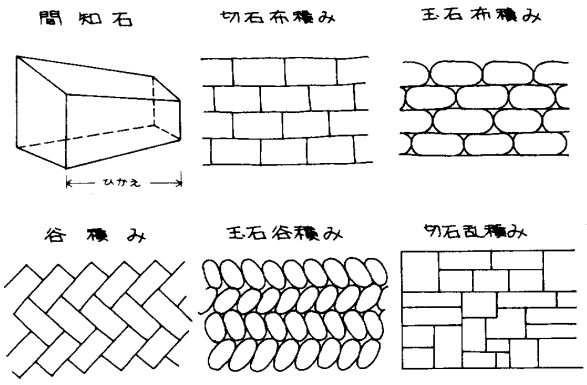
金沢城の石垣は，ほぼ全体が地元産の石材によって構成され，特に戸室石による（赤石青石）美的効果を企画化した点大変めずらしい城石垣である。このように石垣に見られる石積みの用石工法は多種に及び現代の環境空間の修景に今も生きづいている。

築石工法のもっとも基本的な方式には「野石積み」と「樵石積み」に大別することができる。「野石」は山野にある自然石のことで「天石」とも言う。形の角張ったものを「野角」，丸味のあるものを「呉呂大」，「玉石」と言い，長めのものを「野板」と石工達は呼んでいる。これ等を巧みに使いわけ石垣に積む方式が野石積である。

「穐石」は野石に対して岩盤もしくは，岩塊としてある自然石を，大割，小割にしたものの総称である。また「野面石」と「切石」に分けることができる。「野面石」のなかで，角錐形に切り割ったものを「間知石」と呼んでいる。「切石」でも長方体のものを「布石」，「野面石」でも「切石」でも正方体もしくはそれに近いものを「枡石」と言っている。

このように石垣工法の用材方式には「野石積み」と「穐石積み」と言う二方式があって，これを迎える基本的構築方式には「整層」，「乱層」の二つの積み方式がある。これを基本として，二つの用材方式と，二つの構築方式とを組合せ，各種の二次的な積み方形式を生みだしてゆく。デザイン的にも構成として面白い組合せの発展である。

① 整層野石積み　　整層穐石積み
② 乱層野石積み　　乱層穐石積み
③ 整層乱石積み　　乱層乱石積み



築城石垣は，野石の乱積みや粗切石の布積みが代表的積み方であるが，石と石との合端に，かなりの空隙が生ずるので，それを埋めるため更に艦鈎石を必要とする。一見粗野に見えるが離れて見るとリズム感があって面白い。

時代的には矢筈積み，亀甲積みがあるが，矢筈積みは，大きさの同じ角切石を地盤の傾斜面にしたがって順次に落しかけるようにして積みあげてゆく方法であり，六角形の切石を蜂の巣型に積んでゆくのが亀甲積みである。

城垣の美的意匠のポイントとしては，積み方に中腹をふくらます「ハラ石垣」，石垣に反をもたせる積み方もあって個性美を見せる。隅角は決まって切石積みとなっており，その反は主として美的見地よりデザインポイントとしておこなわれる。

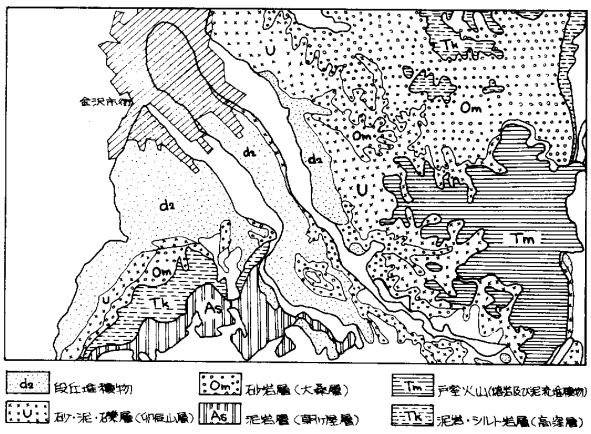
このように石垣と石積みの美は，風土，地形，機能によって考えられ，また石質の種類によって，より個性的な魅力を構成する，金沢の石垣を見て廻はる場合，一般的には，玉石布積み，野面積み，亀甲積み，切石積み，谷積み，きり込み積みといろいろあるが，乱積形式が多い。

加賀の石

加賀平野より展望される白山連峰の山々は，地形的にも複雑と言はれているが，地質的には山岳部では後期中生代層が多く，岩石は砂岩，礫岩，熔岩類が広く分布されている。

山麓部は，それより新しい地層で緑色凝灰岩類が広く分布しており，それ等の地層より有用土石として採掘される石材は，石川県と称するだけに多種にわたっている。

金沢地区地質図



石材の名によって売買される建築，陶土その他の原料として利用される土石は，能登地方をも含め約70種と言はれたが，近年混凝土の使用が盛んになるにつれ衰退をたどっている。現在採掘されているものは僅かであり，大半は中止またわ時々採掘している。

特に金沢近郊で産する石材数も少なくなり，現在約14種ほどと言はれているが，実際は産名のみが知られており採掘されていないものが多い。次に産量には差があるが主なものをあげてみたい。

戸室石

金沢市街地より南東８粁，薬草で知られる医王山の手前にある山で第三紀火山（歴史時代の活動記録はない），爆発で戸室山の泥流が西方に広がり卯辰山層を覆って推積したと言はれている。

この戸室山の溶岩は，角閃安山岩で，耐火，風化に強く噴出の際，酸化作用で赤色を程したものを「赤戸室」と称し，一般には青灰色で「青戸室」と呼んでいる。

金沢城の城石垣，兼六園の雁行橋，武家屋敷土塀の腰石と使われ昔より名を知られているが，藩政時代は「お留石」として一般庶民の使用を禁じた。青戸室は，辰己用水の石管として一部使用されているが，赤戸室は装飾的価値，青戸室は実用性と言った使い分けがあったのかも知れない。重さは，30cm立方が赤戸室が65.5キロ，青戸室が75キロ，水分吸収は，赤戸室2.5キロ，青戸室1.5キロの重さの変化がある。

平沢石

平沢石は犀川支流，平沢上流平沢町より産石する安山岩質凝灰岩である。石基中に濃草色なる斑点があるが，質性は見た目以上に硬く，笞もでないので古くより近郊の農家の水廻りに使われていたが，昭和34年頃より道路も整備され，最近は建築材，特に塀石として使用されている。石川県庁，石川県美術館，金沢観光会館等の石塀は平沢石である。

坪野石

金沢南部，高尾山の奥にある坪野町周辺より産石されていた。元来臼石として用いられた石材であるが，品質は堅く色は黒く，水を打っと黒さが一段と鮮やかになるので，庭石，手水鉢，高級料亭の玄関の敷石張りに使われていた。

延宝５年，前田利常の時代から御算用場の申し渡しによって「とめ石」になった記録がある。現在は量も少なく採掘されていない。

小原石

小原石は平沢石と同じく，犀川上流小原町に産石しており，輝石安岩にて帯紅色の石基の中に白色長石及び黒色輝石を散在した硬質の石であるが産量は少ない。

鈴原石

犀川上流寺津町に産し，安山岩質の凝灰岩で，緑色の大形緑泥石物質の集合体によって成っている。質は硬い反面もろさがあり利用度は少ない。

小鳥石

小鳥石は，犀川上流国見山より産し，別名黒御影とも言はれたが，黒色輝石安岩の熔岩で，堅い一面もろさもある。断面は黒色貝殻状をしており光沢をもっている。

カソヤ石

犀川上流，駒帰町の近く嫂杉町に産する。「カソヤ」とは河合谷の訛りで，安山岩質の凝灰岩で一面青緑色の石基より成っている。

山川石

犀川の支流，平沢川の山川町より産する。石英粗面岩質凝灰岩で黄緑色石基中に白色礫状の陶土採物質を混じ質は軟い。

滝ヶ原石

小松市滝ヶ原に産する石，金沢産ではないが，藩政時代より金沢の家屋や塀垣に使われる。

また，金沢城内の橋石，兼六園にも使われている。石質は石英粗面岩質凝灰白色，石基中に緑泥石採の礫を混ずる蛙目で硬い。現在も建築石材として広く使われている。

白華石

小松市八幡町近くに産する凝灰岩で，黄色が強く明るい感じの石である。近年採掘される様になり，主に石塀として利用されている。

この他，金沢近郊では，額谷石，鷹巣石，菩提寺石等があるが一般に脆く陶土化に利用されている。また福井県産であるが，越前青石は，

藩政時代より広く使われている。

『石と町名』

金沢近郊に産する石も意外と多くの種類を見いだすことができたが，金沢を代表する戸室石については，長い歴史の中で市民生活に深く溶け込んでいるようである。

金沢の地形を表徴する小立野台地一帯を昔は山崎山と言い，そこにあった村を山崎郷，山崎村と言った。この「山崎」なる名は，白山から長く続いている「山のさき」と言うことであるらしいが，旧町名改正前には小立野には山崎町が存在していた。

このように町名の由来には，それなりの歴史的背景や地域の特性，また行政的配慮を知ることができる。金沢における幾つかの町名と石との結びつけを述べてみたい。

石引町

石引は現在も町名として残っているが，昭和39年の住居表示改正で地域区画は変動している。

1592年（文禄元）前田利家によって金沢城が修築され，城の石垣の使用石として，戸室山より石を切り出すことになるが，小立野台地までくると，丸太棒を並べ大勢の人夫によって運んだので，その通りを石引往来と言い，両側を石引町と名づけた。周辺には武家屋敷が並ぶが，旧犀川村，浅川村への物資供給地として1830年（天保の頃）頃より商家が建ち並んでくる。現在は，金沢大学，金沢美大，金沢女子短大，北陸学院，県立金沢商業高校と学園文教地域でもある。

石浦町

兼六園に隣接した町であるが，石浦という地名は「石うら」とかな書きが正しいと「万葉集」などに書かれているが，言葉の意味は，石占いすることを意味する。石占いが「石うら」になったのであろう。

石浦神社はこの「石うら」の名をつけたもので，現在の石浦神社は，前田利長ととき，石浦郷の下石浦村より現地に移したものと，元和元年の前田利常の文書のなかに書きしるされている。現在は本多町に改名されている。

石屋小路

1592年（文禄元）から1599年（慶長４）この間に前田利家，利長によって金沢城の修築，築城が続いておこなわれている。この石工事に関して当時の城奉行後藤象三所組下の石工達を，西町御門，黒門より出入りに便利な場所として住まわせ，これを石屋小路と名付けたと言はれている。また一説には，後藤家の配下に石屋と言う御普講奉行がいたとも言はれる。

石屋小路は現在の武蔵町，安江町あたりであるが，昔は住吉町，栄町にまたがっていた。1616年（元和２年）寺町台地，卯辰山台地，小立野周辺に寺院群を集めるが，その折り石屋小路の石工達も三周辺に転居させられている。

穴町

金沢の旧町名であるが，穴町と言うのは呼び誤って伝えられたもので，穴生町であったと言はれている。金沢城修築の折り近江穴生の者が宅地を賜ったことから穴生町の名が起ったものと思うが，後に上地町と言い，現在の神谷内の一部である。

穴生とは，城郭の石垣などを築造する者の職名であり，金沢城の修築のとき招ねかれ，完成後も金沢に住みつき地廻石工として働いていた。

石伐町

金沢には，大工町，吹屋町，象眼町と職人町が多くあったが，石伐町も石切り職人が住んでいた町である。市史によると20人の石切りが住んでいたと言はれている。現在の寺町の一部である。

西御影町

現在の御影町周辺であるが，この地は犀川の河原であった処を整地し町を造った。当時は川幅もあったので，犀川の上流よりの石材や金石港（宮腰）より他産地の石材を船で運び込んだりした。藩政時代には，ここに石奉行の出張所

が置かれていた記録がある。

坂と石垣

長崎のオランダ坂，東京湯島の女坂と言った個有名詞としての強い響きはないが，浅野川の北岸に伸びる卯辰山丘陵，犀川南岸に扇状的に広がる寺町台地，その中央に河岸段丘的に位置する小立野台地（標高60m）と，地形の変化に富む金沢を「坂ある町」と呼ぶことも不思議ではない。

緑り豊かな金沢は，この台地の斜面は地形景観，即ち金沢のランドスケープの空間的構造として貴重な存在である。今後の保全に対する対策次第では金沢のイメージを失なう結果になりかねない要素を持っている。

金沢の坂道は，このような地形に取りすがるように大小数多く存在し昔より生活の道として形成されてきている。この坂道の斜面に一層景観を添える要素として，土留の壁垣に見られる石積みの美を窺い知ることができる。そしてこれ等の石垣は金沢城や兼六園の石垣とともに景観の主要な役割を演じている。

尻垂坂

今は兼六坂と言っているが，兼六園を左に卯辰山を右に望む長い坂で，昔は尻谷，修理谷，汁谷とも呼ばれていた。

兼六園を囲み坂の流れにしたがって石垣が構成されているが，石積みは，城石垣のように組石されている。寄観亭から石川門前の角までは自然石を乱積みしてあるが，石門を風雅に美ししく見せるための演出かも知れない。

坂上にある旧奥村家屋敷塀（国立病院）の赤戸室石の腰石は藩政時代のものであるが，垣石と対称的に面白く，城下町の雰囲気を強く感じさせる。

八坂

尻垂坂の登り口と旧奥村家の屋敷塀に狭まれた胸つき八丁の急坂である（東兼六町）。

藩政時には宝憧寺と言う寺が坂上に有ったので宝憧寺坂と呼ばれていた。当時は荒地で幾く筋の道に分かれていたので後に八坂と言はれる。坂下からは現在の扇町，小将町えと継ながってゆく。

坂下の周辺には下級武士の一群が住でいたが，坂下の右手には，松山寺，鶴村寺，安楽寺，雲竜寺と古い寺院群もあり，この寺院群の石垣のなかには，金沢城，兼六園とともに藩政時代の古い石垣が現在も残っている。この地域は金沢に住む人々も余り知られていない。

木曽坂，馬坂

木曽坂は石引３丁目より東兼六を通り扇町之抜ける坂で旧町名では百々女木周辺にある。このあたりは木曽谷に続く深い谷であった。今でも木曽坂や馬坂を散策して見ると，その面影を残しており，現在谷川は用水路になっている。

金大附属病院北側から天神町２丁目えとおりる坂が馬坂である。カーブの多い急城で中腹には不動明の小さな社があり，脇の滝口より冷いわき水が流れている。木曽坂，馬坂ともに，土砂崩れを留めるため野石を高く種み重ね石垣が造られているが，馬坂の登りつめの処に高源寺があり，寺院の石垣に時代を感ずる。

嫁坂

本多町１丁目より小立野台えあがる急坂である。「金沢蹟志」によると，篠原出羽守（築城奉行）の娘が嫁ぐためにわざわざ造った坂であると記録されているが，伝説では，折りあいの悪るい姑が此こから嫁を谷底につき落したことから，嫁殺し坂と言い後に塚坂となったと言はれている。最近，坂道が階段式に改修されたが，急斜面のため周辺の石垣には充分な配慮がなされている。石積みは野石積みである。

大乗寺坂

本多町２丁目より厚生年金会館前に出る坂道であるが，土留石垣と石段が調和がとれ，カーブもほどほどに美しく望めることができる。

下から右手が崖になっているが，夏は緑も深く樹門をとうる風が汗をひんやり冷やし心地よい。絵になる坂道である。

天神坂

金沢美大前より，小立野台地にそって田井町，鈴見町に抜ける重要な坂道である。

大正の初め頃まで，道も細く山道で椿やカエデなどがうつ蒼と茂っていたと言はれている。

坂下に椿原神社（旧田井福社，寛政12年の縁起で明治７年に椿原と改名現在地に移る）があるが，金大医学部側の石垣と神社の石垣や年輪ある杉並が強く印象づけられ石垣に重さを感じさす。

桜坂

寺町台（寺町３丁目）に上る坂道であるが，右手に城壁を感じさせるように高く石垣が積まれ，坂道を挾み左手は犀川べりに落込むように石垣が造られている。また左手の急斜面に石仏があり，参詣者のための信仰の石段が造られている。また上り口より寺町台へ「W型」に抜ける別の石段もあると言った珍しい坂道を構成している。

右手の高い石垣は，樵（こり）石の野面積みが中心であるが，中央部分の一部と「W型」の石段の側面の石垣は野石の玉石谷積みになっており変化あるデザインが見られる。

「W型」石段と犀川べりにそって多くの桜の木がめだつが，これは紀元2600年を記念して植えられたものであり，春の季節には石垣と調和し桜の名所となる。また対する小立野台より金沢らしい景観としてこの石垣を美しく望むことができる。

観音坂

東山１丁目にある素朴な石垣によって土留を保強されているが急な坂道である。坂の下の道には低い軒や格子戸の家並が今も残っており情緒を感じさせる。

坂は卯辰山観音院の裏手に抜け静かな遊歩道と続いているが，1855年（安政２）凶作の折り，飢えた町民が城内まで届けと米価高を訴え絶叫しながら卯辰山へ登った坂として伝えられている。坂の下にある寿経寺門の前には，当時そのため斬首された７人の冥福を祈って造られた七福地蔵が祭ってある。

主計町の石段

紅殻格子が生きる情緒ある路地の一角にその石段がある。石段は22段で「く」の字に曲っており，昼間はひっそりとしている。一筋奥の久保市剣神社は泉鏡花の生地の近かくで，境内には，「うつくしや鶯あけの明星」の句碑が建っている。

その他にも金沢の主な坂は，新桜坂，不老坂，二十人坂，亀坂，蛤坂等々あり，坂に見られる石垣は多い。また神社仏閣等の石垣，犀川，浅野川護岸の石垣堤と町並と石垣の結びつけは強く，金沢の景観を引きたたせている。

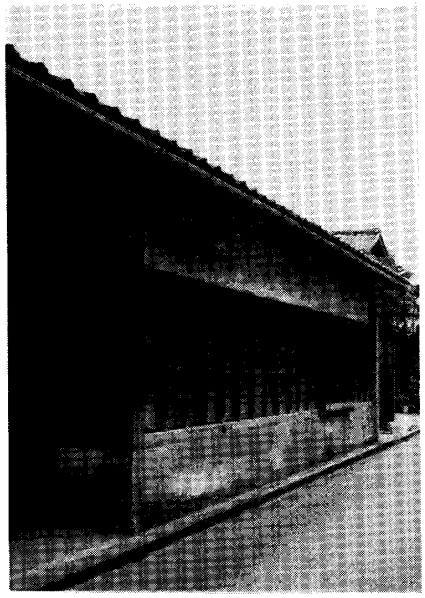
現在金沢で藩政時代より残っている石垣はごく僅かで淋しいかぎりであるが，参考までに記すならば，金沢域及び城内，兼六園，八坂寺院

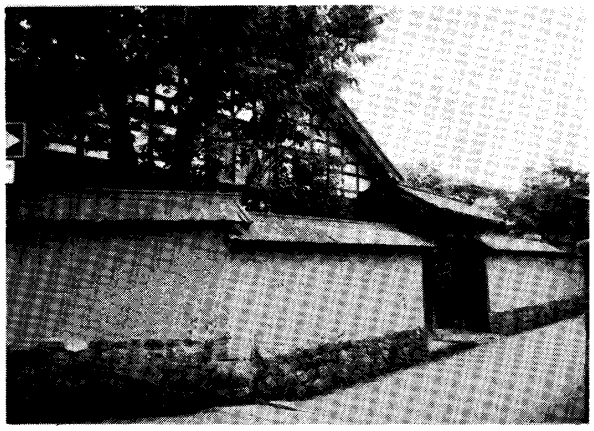
群の一部周辺，椿原神社，野町神明宮裏石垣の一部，用水路護岸石垣の一部等である。

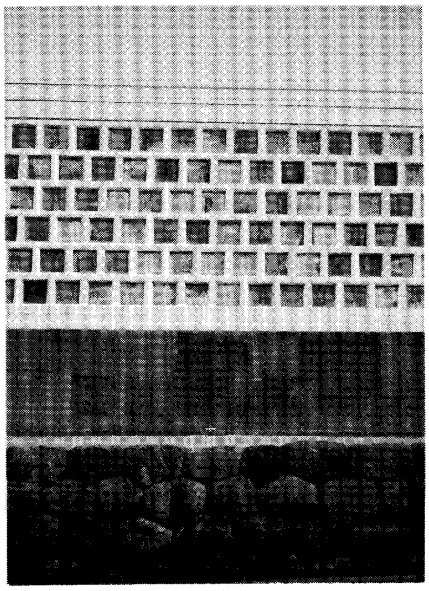
戸室石と塀

城下町金沢は，1631（寛永８）を境えに城内にあった八家（禄高万石以上），人持組（八家に次ぐ家柄）の屋敷を城郭周辺に配置し，特権町人には土地興え町づくりに協力させている。

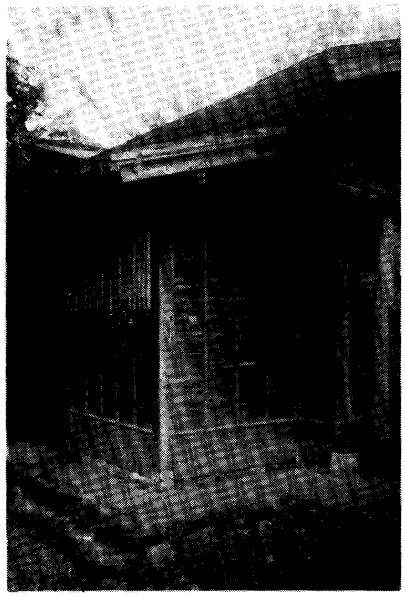
金沢の都市個性の表徴は何と言っても武家屋敷にあるが，明治以降都市の近代化が進むにつれて変貌も激しく，現在当時の姿を見せてくれるのは長屋門や宅地を曲う土塀と，僅かに下級武士の屋敷の面影だけである。



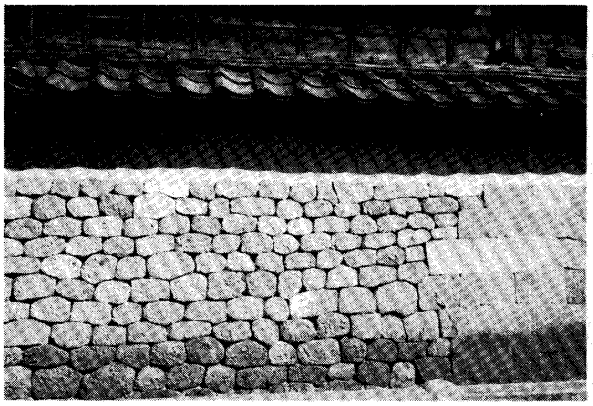




その武家屋敷における長屋門や土塀に見られる腰石の特色として戸室石使用の役割をあげることができる。八家の屋敷塀の腰石は，人持組の腰石より高くしてある（石は赤戸室）。平土では禄高や家格によって長屋門の土台には青戸室石，土塀には戸室石や栗石（川石）を混入している。与力や侍の家では戸室石の使用は少なく土台の角石に用いる程度である。同心や足軽に至っては栗石のみである。



貴重な存在として，現国立病院が使っている旧加賀藩家老奥村邸（一万七千石）跡の塀は，赤戸室石で下部の腰石は亀甲積みで元禄期のものと言はれている。



町家における石材利用の姿は，職業要素によっても異るが，入口の柱石，敷石，また窓格子下や下見板下の石材利用があり，コバ板（板茸）が飛ばないよう石を乗せた屋根石の適切な利用はよく知られている。しかし石材は滝ヶ原石，越前石，小原石，野石といった戸室石以外の近郊産の石である。

また格式ある寺院，特権町人，家柄町人の家に対し戸室石使用については特別の許可を與えていたが，その戸室石は青戸室が多く赤戸室の使用に対しては厳しかったようである。このように戸室石は当時，階級身分を示す目印としての要素を持っていたことが伺がえる。

赤戸室石の機能と装飾的利用として見るべきものは何といっても，成巽閣正門と塀や巽長屋であろう。なまこ壁は，純白の漆喰壁と漆喰に縁（ふち）どられた青黒色，灰汁色の平板瓦は鉛瓦の屋根とともに品格ある魅力を表徴しているが，基礎石垣の切積み石と腰石の赤戸室のみ切整層乱積みの調和は，真に造型の美である。昭和38年重要文化財に指定されてたが時代を感じさせない新鮮なモダンさを感ずる。

戸室石と言うことで余り知られていないのが，尾山神社本殿側面にある煉瓦造りの透塀は珍らしい存在である。明治６年に造られたものであるが，明治初期西洋文化移入時代の洋風を加味した塀と言えよう。尾山神社神門の設計をアドバイスしたと言はれるオランダ人医師ホルトマンによるアイデアかも知れない。

腰石が青戸室石で構成され，その上に煉瓦が積み重ねられ，その壁面に透視窓を点在させ，透視窓には青戸室石による前田家シンボルの梅章がはめ込まれている。笠石はこれも青戸室石である。当時としては大胆かつモダンなデザインである。

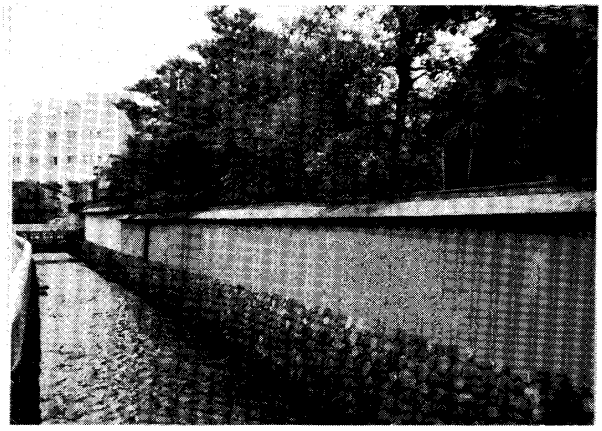
この様に藩政時代の戸室石利用の塀は決められた範囲の中で厳しく使用されたことを意味している。明治に入り大衆も戸室石の利用ができるようになったが，やはりコストも高くついたのか限定されていた感がする。明治のものとしては，旧四高の石垣，高岡町の林政人氏邸の塀などがユニークな使われ方をしている。

用水と石

三つの台地に流れる犀川，浅野川，更にこの二つの川を水源とする用水は現在も市街地を網目のように流れ続けている。

用水は，前田三代藩主利常によって軍事戦略，防火対策を考え，犀川の水を城内に導入すべく板屋兵四郎に命じ，まず辰己用水を1632年（寛永９年）に完成させている。以後，町の拡大にともない順次大野庄，1573年（天正年間）鞍月，中村，高畠，小橋，中島と生活用水として発達し，現在は小河川を含み十八の用水河川が金沢の町並に調和し，都市景観を創り出し金沢の風土を一層と保っている。

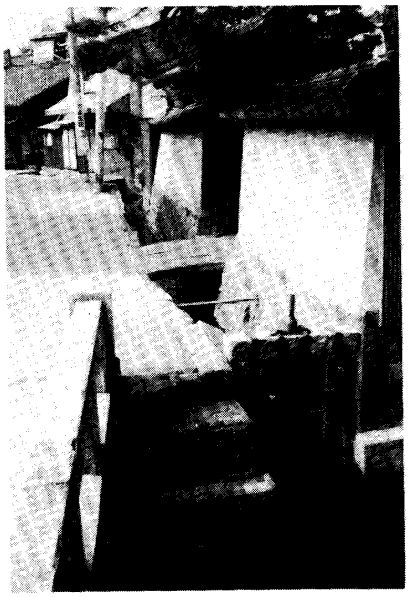
用水の特徴として，水量もあり，水も奇麗で流速もあるといった点であるが，用水路には石垣が組みこまれ，土塀や裏庭の樹間を縫うように流れ，個性と特色ある用水といえよう。



石材利用としても，辰己用水に関する独創的水利技術は，途中金屋石による石管によって土中を流れ，サイホン応用についても石管を利用している。水路護岸には野石の石積みが随所

にあり，場所によっては藩政時代の石積みもある。今でも邸内の庭に用水を曲水として流し，その取り入れ口に見られる石組みが面白い。随所に見られる堰止めや洗場の設置等，金沢の用水には石の利用が多い。

用水に見落すことのできないものとして，用水に掛けられた無数の小橋があるが，これらの橋には，あかね橋，御歩橋，思案橋，右衛エ門橋といった名前がつけられており，昔は素朴な石橋などが掛けられていたが，今はコンクリートや新しい石橋になってしまった。この



用水路から石垣や数々の石の利用をとってしまったならば，誠に味気ない用水になってしまうだろう。

土塀にそって流れる金沢の用水は，垣根ごしに見える木々と草花が石垣と一体になって，風情ある金沢の文化的環境を維持する貴重な遺産でもある。　（続く）

参考文献

ものと人間の文化史　15	田淵実夫
石屋小路史	迎　四三雄
日本の石	加藤　栄一　飯島　　亮
わが町の歴史金沢	田中　喜男
加能郷土辞書	日置　　謙
金沢市史	金沢市